

## 多摩学資料室の位置づけと有効利用

### Library on Tama-Area Studies: Positioning and Its Effective Use

共同研究メンバー

○大森映子\*、諸橋正幸\*、志賀敏宏\*、中庭光彦\*（○代表、執筆者）

#### 1. 多摩学資料室の位置づけ

多摩学資料に関しては、多摩キャンパス図書館内に「多摩学コーナー」を設け地域関連の一般書籍 241 冊を揃えている他、「多摩学資料室」が別途設置されている。「多摩学資料室」は、東京都立中央図書館からの寄贈書籍を基に、旧東京市や多摩地域関係の区史・市史等約 2,300 冊（2015 年 8 月現在）を収蔵し、利用者の便をはかっている。さらには、多摩学電子新書を大学ホームページ（<http://www.tama.ac.jp/guide/tamagaku-shinsho.html>）にて公開している（多摩大学自己点検評価委員会、2015、p.87）。

多摩学コーナーと多摩学資料室の目的の違いは、前者が多摩地域研究に興味を持つ一般学生や市民を対象とした勉学者への入門ガイドを中心とした蔵書を揃えているのに対し、資料室は、その名の通り、研究者およびアクティブ・ラーニングの一環として研究する学生などに対する情報提供を目的とし、一次・二次資料を中心に集めている。

#### 2. 多摩学資料室の現状把握

##### 2.1 収蔵資料の内容

現在、資料室で管理している蔵書 2,300 点の内訳は以下のとおりである。

- |   |         |
|---|---------|
| (1) 自治体史、資料集関係（多摩地域関係）                  | 約 450 冊 |
| 現在、入手可能な基本資料の 8 割程度を揃えている               |         |
| (2) 報告書／資料目録                            | 約 400 冊 |
| 旧都立図書館蔵書からの寄贈図書が中心となっている                |         |
| (3) 「多摩のあゆみ」他、定期刊行物                     | 約 200 冊 |
| 「多摩のあゆみ」100 号まで（101 号以降は多摩キャンパス図書館で所蔵）他 |         |
| (4) 社史、企業史                              | 約 50 冊  |
| 旧都立図書館蔵書からの寄贈図書が中心となっている                |         |

---

\* 多摩大学経営情報学部

- (5) 研究書 約 100 冊  
江戸・東京関係の書籍を中心としたものである  
(インターゼミでの多摩学研究に使用したものを含む)
- (6) 20 世紀段階のガイドブック、随筆類 約 1,100 冊  
旧都立図書館蔵書からの寄贈図書が中心となっている

本共同研究においては、2,300 点を上記のカテゴリーで分類するとともに、(1)、(2)、(4)を中心に 800 点ほどの簡易目録を作成したところである (2015 年 8 月現在)。

## 2.2 管理体制

現在は、専属の管理者がいないため、書籍の貸出は原則として禁止しており、利用者には資料室で閲覧および作業を行うよう要請している。

## 3. 多摩学資料室のあるべき姿の提案

著者らは資料の収集方針とサービス・管理形態の 2 点からあるべき姿を議論したが、ここにまとめるにあたっては、資料室が単なる図書閲覧の場所ではなく、研究過程で培われる知識共有の場 (Studio for Research) となる工夫をすることが重要であるというメンバーの共通した考え方を反映させた。

### 3.1 資料収集方針

多摩学資料室は、以下の方針で積極的な収集にあたるべきである。

#### (1) 紙媒体資料の収集

資料室という性格上、ISBN の付与されていない資料収集が今後増えていくべきである。特に、散逸が心配される学内報告書類は、現在、統一的な保存が考えられていない状況にあり、これらを保存することは重要である。

また、多摩地域企業の社史 (私企業に限らず NPO 等の団体も含む) など、大企業を除き、散逸の可能性が高いものであり、企業研究の上からも、積極的収集保存を考える必要がある。

さらには、これら紙媒体資料のデジタル化 (OCR による文字コード化によらずとも、とりあえず画像として記録する手段もある) も重要な作業である。次節に述べるサービス・管理形態を考える上で、デジタル化は多くの効果をもたらす。

#### (2) デジタル・アーカイブ (フィールドワーク等で作成されたもの)

フィールドワーク (アクティブ・ラーニングにおける学生参加型の研究も含む) では、アンケート、インタビューなどが、デジタル化されて記録されることが多い。また、その保存方法もテキストに限らず、音声 (録音)、静止画像、動画像など、様々なものがある。現状では、これらは研究者個人の保管となる場合がほとんどであるが、資料室として保管し、他の研究者と共有することで多摩学研究全体の質向上をはかることがで

きる。

研究過程で生じる二次資料も、重要な情報である。資料加工の結果は、最終的には論文・報告書等で公開されるが、二次情報であっても公開しないものも数多い。さらには、加工プロセスを記述した詳細な研究ノートも、個人のアーカイブとして存在するのが現状であり、散逸の可能性の高いものである。これらをどこまで資料室の管理に移すかは、研究者個人の判断によるが、そうした研究ノートを保存する「場」として資料室が存在するということは重要である。

### (3) デジタル・アーカイブ（インターネットに公開されている情報）

ビッグデータ時代の到来により、現在のインターネット上では、様々な情報がSNS等を始め、様々な手段でネット上に流れている。これらの多くは、組織の発信によるか個人の発信によるかには関係なく、時間とともに失われていく。グーグル社などのネットサービス企業は独自に収集・蓄積しているのであろうが、研究資料として一般に開放されているわけではない。したがって、多摩地域に関するネット情報を収集するシステムを導入する必要がある。

## 3.2 サービス・管理形態

### (1) 目録

現在作成中の目録は、どのような資料にでも共通に使われる書誌項目である書名、著者名、出版年、出版社などを入力しているが、資料が多岐にわたることを考えると、図書館一般で使われている書誌項目で統一することは不可能である。資料のデジタル化やマルチメディア化に即した目録作成にはhtmlのようなタグ言語を利用した半構造

データ（用意した項目に該当する情報がすべてあるわけではない、あるいは、その書誌のための特別項目を追加することができるデータ構造）にするのがよい（図1）。特に、図中の備考欄のような研究者が自由に書き込める項目を付け加えることで、資料の蓄積にとどまらず、資料を利用した研究者の考えを反映させることができる。また、インターネットで利用できる（特に、全文検索による自由な検索機能を利用する）という意味合いから、htmlによる記述を採用する。この際、目録入力編集用インターフェースの提供は必須である。

ISBN: 0193-400501-0946-0
保管場所: 書棚=abc10, 電子ファイル= <u>xxx/xxx.pdf</u>
<b>伊勢物語 附現代語譯</b>
譯註: 中河與一
角川文庫 466
出版社: 角川書店
発行年: 1972年8月30日
諸橋による備考: 第8段より第12段まで武蔵を中心とする多摩地域の遍歴記述 第9段は「古代・中世史から見た多摩地域の“独立”気風」 ( <a href="http://www.tama.ac.jp/cooperation/img/tamagaku/01_morohashi.pdf">http://www.tama.ac.jp/cooperation/img/tamagaku/01_morohashi.pdf</a> )で 引用

図1 htmlで表示した目録フォームの例

## (2) 既存資料のデジタル化

紙媒体の資料管理は、コストが高くなる。なるべくデジタル化をはかることが肝要である。テキストに関しては、二次加工の観点からは文字コード化が望ましいが、とりあえずは画像データとしての保管でも構わない。電子化された資料の保存は、破損・紛失リスクを避ける上で、クラウド型で行う必要がある。

保存に関しては、最初からデジタル化されている資料の場合も同様である。

## (3) 注釈・校閲情報の蓄積・活用

研究者による情報の追加に関しては、研究ノートなどと同様に独立した情報として登録することと、目録の中に情報として付記する方法を提案したが、それ以外に（主に一次情報に関して）注釈（annotation）として追加する方法が、文献資料の研究ではよく使われる。こうした注釈は、たとえ出版物にならなくても、原資料の中に含まれるべき性質のものである。デジタルファイルに注釈をつける場合には、文書ファイルの脚注機能や校閲機能を使えば、自然に付与できるし、その他のメディアファイルの場合にはプロパティなどに付け加えるなどの処理をすれば、印刷物には現れない情報ではあるが、確実に研究者間での知識共有と議論の場が生まれる。

（文責：諸橋正幸、大森映子）

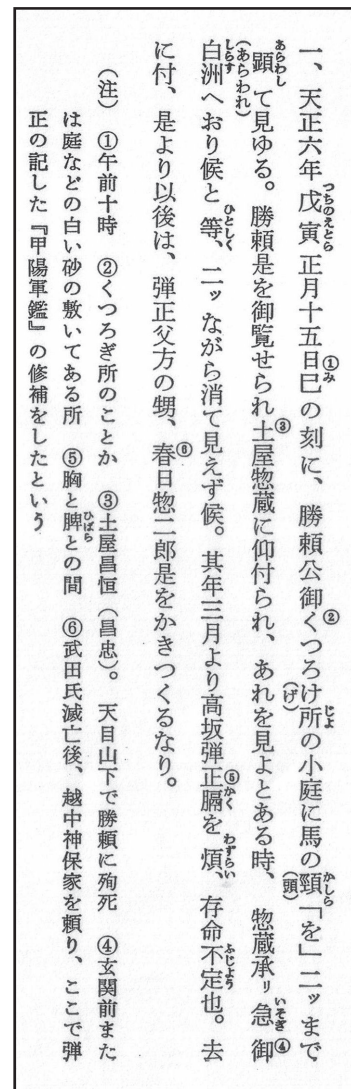


図2 磯貝・服部（1976）における  
「甲陽軍艦」品第54の注釈例

## 参考・引用文献

多摩大学自己点検評価委員会（2015）平成26（2014）年度 多摩大学自己点検報告書、多摩大学、東京  
磯貝正義、服部治則校注（1976）改訂甲陽軍艦（下）、新人物往来社、東京